



京都市左京区にある自宅のレッスン室で。

「オープンG#」の世界が フルートの新しい楽しさを 教えてくれた

テオバルト・ベームがこだわったといわれる
オープンG#の楽器に70歳から挑戦し、
その響きの良さとシステムの合理性を知った。

70歳
から挑戦!

取材協力：笹井純、株式会社グローバル

——オープンG#（以下オープン）のフルートに変えられたのはいつ頃ですか？

伊藤 70歳になる直前だったと思います。2013年に、僕の演奏生活50周年を祝うコンサートを生徒たちが名古屋で開いてくれたのですが、この時はオープンで演奏しました。その1年ほど前からですね。

——指はすぐに慣れるものですか？

伊藤 ただ吹くぶんには2〜3週間もすれば慣れます。それでも、オープンに変えて1ヶ月後くらいにレコーディングの仕事をしたときには、小指の上げ下げを間違わないように、楽譜にボーイングのアップ・ダウンと同じ「V」「^」マークを書き込みました。

50年以上もクロズドの指が身体に染み込んでいますから、いまだに間違えることがありますね。大事な場面でも、気持ちよく吹いているような時に、ひょいと前の指を使ってしまう。とくにG#より上の音は、クロズドの指と一緒にです。上から気持ち良く降りて来たようなときについて……（笑）。

それでも、オープンに変えてからフルートを吹くのがまた楽しくなりました。今まで苦労していたことがオープンだととても楽になるという発見が面白いし、出来なかったことが出来るようになるという達成感もあります。もちろん、オープンに変えたときは、もう一度スケールを一から必死になってさらい直しましたけれども。

KI
京響退団後に再度トライ！

——なぜオープンに変えようと思った？

伊藤 昔からオープンG#のシステムに興味があったんです。クロズドの場合、G#キーが裏側にも二重に付いているの

フルート奏者／名古屋芸術大学名誉教授

伊藤 公一

Koichi Itoh

Profile 1943年名古屋生まれ。中学3年からフルートを始め、岐阜大学2年在学中の19歳（1962年）で京都市交響楽団に入団、2年後に首席。1973年スイスのボスヴィルでマルセル・モイーズのマスタークラスを受講し、その演奏がモイーズに賞賛された。1995年京都市交響楽団を退団、ソロや室内楽の活動を行う一方、後進の指導に力を注ぐ。門下からは国内外で活躍するオーケストラ奏者はじめ多くの演奏家が育っている。門下生が主催した2003年「デビュー40周年を祝うコンサート」、2013年「フルーティスト50周年を祝うリサイタル」は好評を博した。2005年から2015年まで名古屋芸大及び大学院教授を務める。現在同大名誉教授。2013から3年連続でイタリアで開催されたウィリアム・ベネットのマスタークラスにゲストとして参加し、ベネット氏との共演リサイタルを行った。

が疑問でした。気分的にも何となくすっきりしない（笑）。オープンだと余計な穴が無くなりますから、きつと響きも良いだろうなと。

それで一度、ミヤザワのオープンが大阪のドルチェ楽器にあるというのでお借りし、練習してみたけれども、京響に在団中だったこともあり、忙しいスケジュールの中で本番をこなしながら変えるのは難しかった。その後しばらくしてオケを辞め、教えながら時々ソロを吹くという環境になって「もう一度やってみよう」と思ったわけです。

楽器は、アルタスに洋銀のオープンがあるというので注文しました。それで届いたものを吹いてみてビックリしたんですね、あまりの響きの良さに！特にG#から下、右手の音の響きは想像以上でした。音だけじゃなく、メカ的な動きもとてもスムーズに行く。テオバルト・ベームが推奨しただけあって、「これは慣れればきつとオープンの方が楽だろうな」とすぐに感じました。

指にしても、例えば左手の小指は、クロズドだとずっと上げっぱなしで、必要ときに押さえるわけですが、オープンだとずっと押さえたままでいられる。その方がかえって安定して楽器を保持できるんですよ。F#-G#の指の動きも、クロズドだと上げ下げが逆の動きになるけれども、オープンだと同じ動きになる。

——指を放す・押さえるという動きが一緒になるわけですね。

伊藤 ええ、「指を押さえれば音程が下がる」というシンブルな動きが、G#の音にも適用されるわけです。クロズドの場合は、わざわざこれを逆に行っている。

クロズドで難しかったものが、オープンでは楽になったという指使いは他にもあります。最高音のE♭-Fの動きなどは、オープンだと逆に難しくなりますが、総合的に見ればオープンの方が自然な指の運びになるとは言えるでしょうね。音のつながりもオープンの方が良くなるのを一度でも実感すると、やっぱりこれはベームが考えたシステムなんだと。

——G#より下の右手の音が、オープンだとどのように変わりますか？

伊藤 より密度の濃い、たつぷりとした音が出るように感じます。もちろんクロズドの音に不満があるわけじゃありませんよ。それで充分に満足して吹いていたから、オープンだとより響きが充実するように感じる、ということですよ。

KI
なぜクロズド式が蔓延したのか

——オープンではEメカが不要になるわけですね。

伊藤 そもそもベームは、1832年に新型の円錐型フルートをオープンG#で考案したわけですから、本来Eメカなんて必要なかったわけです。

ベームは、（右手の小指を除き）指を上げて行けば半音ずつ穴が開いていくようにすることで、それまでの運指のシス

今まで苦労していたことが楽になる、
という発見も面白くて……

Koichi Itoh



オープンG#システムのアルタス(総銀製ハンドメイド「PS」モデル)。



アルタスのオープンの楽器が届き、
吹いてみてあまりの響きの良さにビックリした！

テムを改良しました。ところが、ルイ・ドリュという当時のバリ音楽院の教授が、ベームを非常に高く評価しながらも、G#の指だけはそれまでの楽器で慣れ親しんだ指にしないと運指が難しいというので、「ドリュ式」と呼ばれるクローズドのシステムを考案し、フランスで広めた。その流れが今日まで伝わり、クローズドが一般的になったわけですね。

しかし、現在のクローズド式だと、G#に二つの穴が開いている。それが高いEの音に支障をきたすというので、屋上屋を重ねるように「Eメカ」というものが出来た。これは本来のオープンにしていれば必要の無かったメカニズムです。

ベームは、ドリュがG#をクローズドに変えたことに不満を持ち、自分の合理的なキーシステムが「音響的にも構造的にも改善された」としか言えない」と述べています。彼は今の形となった1847年以降、クローズドのフルートは無理に頼まれた2本しか作らなかったそうで、当時クローズドの楽器はルイ・ロットが作っていたようです。

ドリュがクローズドに改変しなければ、いま世界中のフルーティストたちはオープンで吹いていたかも知れない。

伊藤 面白いのは、ベーム自身、ドリュのクローズド式が出た時に、「その考えが間違っていることを速やかに公表しなかったのは間違だった」と悔しがっていることです。というのも、ドリュは後にベームにいわれて「間違だった」と自分で認めてるんですね。ベームは、「フ

ランスを除くドイツやイギリス、ロシアではオープン式が一般的だったので、あえて公表する必要がないと思った」と述べています。しかし、結果としてその後のフルートは、当時のルイ・ロットに代表されるフレンチスタイルが世界の主流になり、クローズドが蔓延することになってしまった。

伊藤さんがフルートを始められた頃はオープンの楽器はあったのですか。
伊藤 当時はカタログにもオープン式が載っていて、楽器を買う時にオープンにするかクローズドにするか聞かれたものです。教則本にもオープンの運指が載っていて、当時の日本のフルーティストたちにもオープンを使う人は少なく無かった。ところがアメリカからヘインズやパウエルが入ってくるようになると、それがみんなクローズドですから、オープンで始めた人たちもみんなクローズドに変えて行ったんですね。

KI オールド・ヘインズのピッチに苦労

伊藤さんは19歳の若さで京響に入団されましたが、そのときはどんな楽器を使われていたのですか。

伊藤 僕は中学3年からフルートを始めましたが、最初は真鍮製の最低音も出ないような安物の楽器でした。その後しばらくしてムラマツの安い洋銀の楽器を買ってもらいました。カバードキーの楽器で、ムラマツがまだリングキーの楽器を作っていなかった時代です。それで京響の試験を受けたら運良く合格したので、まわりからは「もつとちゃんとした楽器を買った方がよい」といわれ、パウエルかヘインズを買おうと思ったんです。でもパウエルだと注文して4〜5年

はかかるといわれ、ヘインズなら1年というのでヘインズを注文しました。

注文するとき、ピッチを選べるというので442を頼んだら、後で分かったことですが、楽器はすべて一緒に、胴体の樽の部分だけ短くしてピッチを高くしていたんですね。ヘインズのデヴォー・スケールが出来る前で、実際のスケールはハンドメイドだと435だったようです。ランパルなんかもおそらくそんな楽器で演奏していた。ですから、音は良くても、オケの中では非常に使いにくい。頭部管を少し抜けばバランスは良くなるけれども、ピッチはもつと下がってしまう。442で吹くために頭部管を一杯に差し込むと、Aの音は良くても、上の音は上るし下の音はどんどん下がる。それで当時コンマスで親友でもあった故田中千香士さん（後にN響、東京藝大）に、ピッチを出来るだけ低めにしたいといつも頼んでいた事も今では良い思い出です。カルメンの間奏曲とかアルルの女のメヌエットとか、フラット系の曲が特に吹きにくいんです。上の音が上がつちゃう。「ウィリアム・ベネットやトレヴァー・ワイたちは穴を埋めて使っている」という情報を耳にして、自分でも穴を埋めてみたりしました。少しは良くなりましたけども。

——クーパー・スケールがまだ出来ていなかった時代ですね。

伊藤 世界的に当時はまだスケールが確立されていませんでした。イギリスのアルバート・クーパーがベネットやワイらと一緒にクーパー・スケールを開発したのは、たしか1960年代の後半です。

そこで今でもよく覚えているのが、73年にスイスのボスヴィルであったモイズの講習会を受けたことです。そ

ベームはドリユ式を「音響的にも構造的にも改悪された」としか言えない」と述べています。



アルタスは「PS」と「AL」の2本を所有。「当初はパワフルな響きを持つPSを使っていたのですが、最近は美しい倍音を含んだ柔らかい響きへと変化してきたALを使う頻度が多くなりました」。門下生たちが開いた演奏生活50周年コンサートはYouTubeで視聴できる。

ここに当時ベルリンフィルのジュームズ・ゴールウエイも参加していて、クーパーの楽器を自慢気に見せてくれました。見ると、僕らの楽器とは穴の位置が全然ちがうんです。下の方の穴の間隔がクーパーの楽器は狭い。もちろん、穴の位置の問題だけではないのでしようが。それを見て羨ましくなり、僕もぜひ欲しいと思ったものの、15年ほどかかるという噂……。クーパーはその後、頭部管しか作らなくなりました。

W・ベネット アルタス・スケールと

——日本のメーカーのピッチも低かったのですか？

伊藤 ヘインズほど低くはなかったですね。日本のメーカーもその後、スケールを見直すようになり、ムラマツが新しいスケールの楽器を出したというので、それを使った時期もあります。サンキョウなども含め、その頃から日本の楽器がどんどん良くなりました。パウエルもクーパー・スケールを採用したというので、それを使ったことがあります。その後フランネン・クーパーに出会い、僕には今までで一番しつくり来たものですから、以来、フランネンの銀、管体ゴールド、その後14金の楽器も手に入れました。自分では「もうこれでいこう！」と……音程も良いし、あとは自分の腕を磨くだけだと思った。

ところが、アルタスのオープンに変えてみたら、アルタスのスケールもまた素晴らしいんですね。ベネットとアルタスの田中（修一）さんと一緒に開発した



イタリアでウィリアム・ベネット氏が主催しているマスタークラスで。左からベネット氏とミチエ夫人、右から伊藤さんと夫人でピアニストの水野久美さん。

ある日突然、雲の上の人だった ベネット氏からメールでメッセージが届いた！

とは聞いていましたが、オープンに変えたときはスケールのことは頭に無かったんです。ところが、音程がとてとりやすい楽器で、一人で吹いている分にはそれほど分からなくても、ピアノと合わせるとそれが良く分かります。

フルートはそれぞれの音の倍音がきちんと揃っていないといけない、とベネットは本誌でも語っています。

伊藤 僕はその方面を勉強したことがないのでよく分かりませんが、きれいな音というのは倍音もきれいに響いているということなんでしょうね。音程を低くしても高くしても合って聞こえない、という生徒が中にはいますが、それなども多分、倍音がうまく響いていないからかも知れない。

——ウィリアム・ベネットは昔からお聴きになっていましたか。

伊藤 憧れの存在でした。LPを何度も聴いて模範にしたものです。ボスウィルのモイーズの講習会にもワイさんと一緒に来ていましたが、遠くから眺めていました。

余談ですが、このときゴールウェイの名前はまだ知らなかった。ヒゲを生やし、ヒッピーみたいな恰好をしていたも、フルートを吹くのが好きでたまらないといった感じで、モイーズの講習会が終わってからも一人で教会に残って吹いている。上手なものだから、みんな集まって彼の演奏を聴くわけです。不思議だったのは、彼の音は近くで聴くとそれほどきれいな音には感じないのですが、離れた場所

録った録音は、同じ演奏なのに信じられないほど素晴らしい音だったことに驚きました。以来ゴールウェイも好きになり、よく聴くようになった。

ある日、 雲の上の人から……

ベネットさんといえば、面識も何もなく、僕にとつてまた雲の上のような人だったとき、ある日突然に奥様のミチエさんからメールを頂いたんですよ。ユーチューブにアップされた僕の演奏をベネットさんが何かの拍子に聴き、日本人のお弟子さんに「この人を知っているか？」と聞いたたら、「私の先生です」と。そのお弟子さんというのは、私が教えた南野香代子さん（ポルトガルのオルケストラ・ド・ノルテ首席）だった。彼女にアドレスを聞いてミチエさんがメールしてこられたんですね。突然に憧れの人から、こちらが恥ずかしくなるくらいのお誉めの言葉をいただくことになった。これには本当にビックリしました。

この話にはもう一つ、後日談があります。あるとき僕がユーチューブで検索をかけていたら、凄く上手なフルーティストを見つけたんです。ローナ・マギー（ピッツバーク響首席）という人で、まだ日本では全然有名ではなかった。調べてみたら、ベネットの生徒さんなんですね。その後ベネットさんとは神戸国際フルートコンクールの審査員として来日された時に初めてお会い出来たのですが、そのとき、イタリアでベネットさんが主催しているマスタークラスにローナ・マギーとデニス・ブリアコフも一緒に来るということを知り、参加しました。そこで彼女の演奏を生で聴いたのですが、それがまた素晴らしいかったです。結局いろんな

モイーズのレッスンを見て

「今までやって来たことは間違っていないかった」と……。

方の働きかけもあって2014年に彼女の来日が実現し、京都公演では僕も共演させて頂くことになりました。それにしても、たまたまネットで見つけた人と3年後には一緒に演奏することになるなんて、まるで夢のような話です。

——イタリアのベネット氏の講習会には3年連続でゲストとして参加し、リサ・イタルも行われていますね。

伊藤 「来るんだつたら演奏しないか」と誘われ、その演奏を気に入っていたいたみたいで、ベネットさんとデュオをやったりリサイタルを開かせていただいたり。

これも面白いと思うのは、尊敬する雲の上の人だったベネットさんということで出会えたのも、すべては僕がオープンに変えたあとの話ということですね。ベネットさんがオープンG#のシステムを使っていることは以前から知っていましたが、私がオープンに変えたのはベネットさんの影響ではなく、私がオープンに変えた後にこうしたすべての出会いが生まれた人の縁というのは、だから本当に不思議なものだと思います。

「歌うように吹く」をモットーに

——ベネットにしろローナ・マギーにしろ、ご自分の吹き方と共通する何かをお感じになりますか。

伊藤 ベネットさんのレッスンをしていると、モイーズにそっくりですね。ご自分でもそれは意識していらっしゃるよう

です。

それが何かと言えば、「歌うように吹く」ということでしょう。モイーズのレッスンは正にそれでいい。歌ったり踊ったり……。それを見て、自分が今までやって来たことは間違っていないかった、という確信を持ちました。歌は音楽の最も基本となるものです。歌うように吹ければ、自然に人にも伝わり、今でも思っています。もちろん、自然に歌うと言っても、西洋音楽には文法のようなものがあり、そこから外れると不自然な演奏になってしまう。

——「歌う」ということは、どなたに教わったわけでもなく？

伊藤 フルートを始めた頃から歌うのは好きでした。中学3年の時に独学でフルー

トを吹き始め、高校2年のときに名古屋で初めて先生に習い始めましたが、吹き方や歌い方を特に教わったという記憶はないですね。その頃から、アマチュアも混じる岐阜大学のオーケストラで吹かせてもらい、オケの先生に誘われて岐阜大学に進んだのですが、そこでイタリアで勉強された声楽の先生のレッスンを受け、初めて歌とフルートがきちんと結び付き、とても音楽的な先生で、そのレッスンに影響を受けながらフルートを勉強していた。モイーズのレッスンに接したとき、その先生のレッスンを重なるように見えたんです。人を引き付けるような歌い回し、それがそっくり同じだった。ベネットさんにもそれを感じます。

——19歳というとき、大学2年の時に京

響を受けて合格されたわけですか。

伊藤 2年の夏です。まさか受からないだろうと思い、京都見物で受付けに行ったら受かってしまった。フルートは20人くらい受けたと思います。とりあえず大学を休学し、やっていけそうになかったら大学に戻るつもりでしたけど、戻らなくて済んだ(笑)。入ってすぐに森正さんが常任指揮者になられて、いろいろ可愛がってもらいました。森さんもフルート出身ですから、「牧神の午後を僕は一息で吹いたから、お前も一息で吹け」とか、真夏の夜の夢のスケルツォも一息で吹かされたり。モーツァルトのコンチェルトを初めてやらせてもらったのも森さんの棒でした。以来、いろんな刺激を受けながら30数年やって来ました(1995年に京響を退団)。

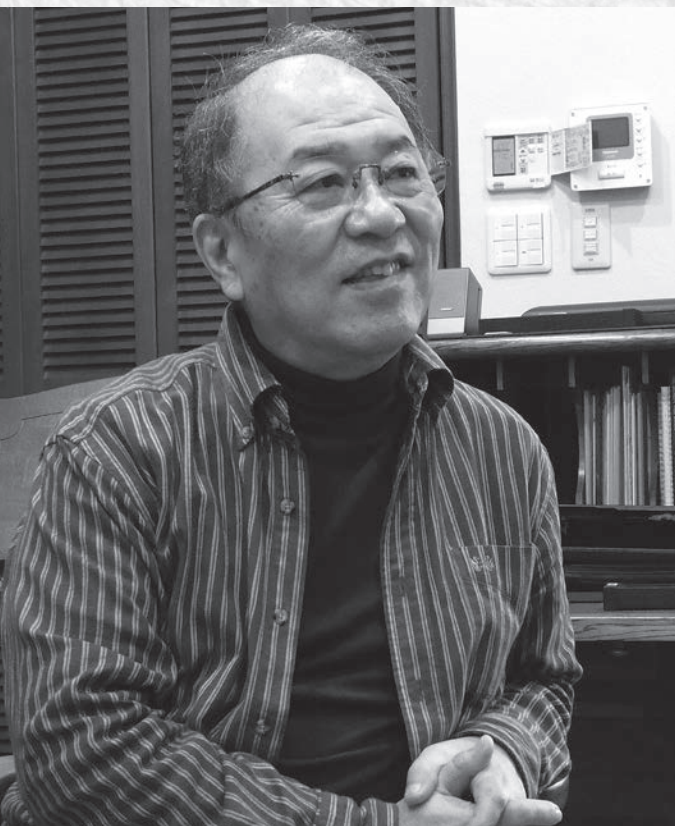
——指導でもたくさんのお優れた人材をオーケストラに送り出されています。

伊藤 みんな勝手に上手になるんですよ(笑)。教えるとしたら、誰もが聴いて自然な演奏だと思えるようなフルート吹きになつてもらうことを心がけて……。

——お弟子さんでオープンに変えた人も？

伊藤 4〜5人は変えたかも知れない。中には途中から変えてオケの仕事をしている人もいます。みんな「変えて良かった」と言いますね。

一つだけ誤解して頂きたいのは、僕は「誰もがオープンにすべきだ」と言いたいわけではありません。僕自身、よく分からずにオープンに変えてみたら、いろんな意味で良いことだらけだった、ということをお伝えしたいだけです。何よりも、その歴史をぜひ知ってもらいたい。歴史というものは、必ずしも良いものだけが残っていくわけではないんですね。



夫人でピアニストの水野久美さんは「とにかくフルートを吹くのが大好きな人で、オープンG#に変えた時などは食事とお風呂の時間以外はずーっと吹いてました(笑)」